OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	公衆衛生マンが外国を旅して
Author(s)	中山, 信正; 保川, 圭司; 中土井, 隆 他
Citation	大阪公衆衛生. 1966, 18, p. 2-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

座談会

公衆衛生マンが外国を旅して



司会　中山信正　市立衛生研究所長

保川圭司　大阪市港保健所長

中土井隆　市立衛生研究所

八木明　大阪府衛生部参事兼医務課長

国田信治　府立公衆衛生研究所公衆衛生部長

長谷川豊　大阪府吹田保健所保健予防課長

□…どんな目的でどこへ



中山　国際的な視野でみた大阪公衆衛生を主題に，最近，海外へいろいろな目的で出かけられた方々のお話しなり，原稿を中心にして，この「大阪公衆衛生№18」を編集しようということで，まず座談会をもということになったのです。

僕は最初，まさかこの座長を仰せつかろうとは思ってもいなかったのだが，〝それは中山君，君が一番ええ〟というのです。何がええ言うたら〝行っとらへんから〟というんだな。海外へ行っとらへんやつか座長せんことには，生じっか知ったやつがすると変な方向へ引っぱっていってしまう。知らんものがいろいろひっぱり出した方が面白いやろ…ということでとうとう私が引き受けるようになった次第です。

最近海外へ…といいますとほかにもたくさんいらっしゃるけれども，この5人の先生方で代表して座談会をもとうということで，お忙しい中ご無理をお願いした次第です。

そこで，まず最初は，各先生にどういう目的で行かれたかごく簡単にお話ししていただけませんか。

八木　私は，英国王室保健会議に参加することが主目的で，保健所長18人，県の衛生部長2人，国立療養所の技官，大学の先生がそれぞれ1人，その他，私のような府県の課長など一行27名の大部隊ですから当初，意図していた調査，研究がスケジュールにしばられて十分でなかったのが残念でした。

中山　保川先生も八木先生と一緒だったのですね。

保川　私も，厚生省の保健所医充足対策の一環として海外派遣の一員となっていったのですが…

中山　優遇策やな，ほうびですな（笑）

保川　衛生局としましては，保健所長が22人おられるのですけれども，とにかく，若い連中，これから15～20年，衛生行政を荷う中堅層を勉強させようじゃないか，ということではからずも私にそのチャンスが与えられたわけです。

私はこの道を好きでやっておりますので，できれば欧米各国の衛生行政機構などをぜひこの機会に見聞したい，というつもりだったのですが，非常な強行スケジュールで，それが充分果たせなかったのが残念でした。

中山　八木先生と保川先生は厚生省の計画の中で実際に各国の公衆衛生を各方面から見てこようということだ

ったのですが，国田先生はちょっと事情が違うようですね。

国田　私の場合，公衛研で，一人ぐらい目的があれば，又，その目的が承認されれば行かせてやろうということでまあ学会出席ということが主題だったのです。実験生物学会，要するに生理，免疫，病理，栄養，生理，生物という学会がアメリカにあるのですが，この６つの学会が合同で年次総会をもつわけですね，これは有名な学会ですが，これの参加ということを主目的としましてその前後をアメリカで衛研，特にカリフォルニヤの州立衛生研究所，ニューヨーク市の市立衛生研究所，その二つの主にウィルスを主体とした検査システム，あるいは費用，陣容，方法等を一か所に長く滞在してマスターしてきたいというのが第一の目的，帰りに欧洲を廻ってきたのは，これは遊びに近かったです。

中山　長谷川先生はどういうような…

長谷川　私の場合，大阪府の海外研修生派遣制度によるもので，テーマは，当時環境衛生課長であった橋本道夫先生の指導を得て公害対策を選んで６カ月行ってきました。講習が大体そのうち半分，これがアメリカ，その他公害行政をやっている行政機関を３カ国，イギリス，西ドイツ，スウェーデンなどを廻って来ました。

中山　中土井さんは，どういう目的で…

中土井　僕の目的は，南カルフォルニア大学で，今年の１月から始められた〝大気汚染に関する行政〟についての６カ月の講習に参加することでしたが，まわったのは，アメリカだけ。タフトのセンターだとかナショナルセンターオブアトモスフェアリサーチというところとか，コーネル大学，ニューヨーク大学などを訪問，それから，サンフランシスコでありました第59回大気汚染防止協会総会で，オゾンの定量法を発表して帰って来たのです。

中山　ありがとうございました。これで一応，皆さん方がいってこられた目的だとか範囲をおうかがいしたわけですが，八木先生と保川先生は，団体で各国をお廻りになり，どちらかというと心臓強くご覧になれたわけで，ここらで，海外へ行って特によかったな，と思われる点をご披露いただけませんか。





八木　むつかしいなこれは…（笑）どうも我々のは31日間ですしね。視察が主で観光が従，これはもちろん当然なんですが，何といってもスケジュールがぎっしり。内地におれば日曜日だからといって休養が許されますがそれもありません。団体行動ですからわがままが許されませんのでスケジュールどおり非常に多くの国を廻っては来ましたが，しかし予定が非常にきついという点からはゆっくり反省したり，かみしめたりする点については欠けたのではないかと思います。

中山　そのかわり，又，総論的に，国際的に…言葉では言いあらわしにくいが……

八木　ええ，それは概念的に例えば外人がアポイントということを非常に重視して，アポイントをとった以上ははっきりとしたスケジュールによって我々に説明もし案内もしてくれる。これは日本人のようにダラダラしていない。はっきり向うはスケジュールを組んでいます。これには感心しましたね，と同時に，それについていけない面があるということも事実ですね。一番我々が勉強を強いられたのはロバートタフトですがね，これは朝の９時半から４時半までぎっしりつまっちゃっている。日程が。８人の講師が入れ代り立ち代りしゃべっちゃってね，これには参った。久し振りに学生時代にかえってね，わからない英語を聞きながら勉強した。ただああいった勉強する雰囲気という点では我々も施設としても研究しなければならないと思いますね。

ただ，各国を廻って来てね，インプレッションというものに独特のものがありますね。

中山　そこで一つお聞きしたいのはね，ぐるっと各国廻ってこられて，大阪で公衆衛生をやっているものの社会的地位とか関心度というものと，国立保健会議に出られた多くの人達の，公衆衛生マンとしての自信というか，そういったものの程度の違いについてどうでしょうか。何となく日本の公衆衛生マンというものは，任務意識というものは強いことは強いのだけれど，まあ政治の一つの様の下の力持ち的な意識があるわけなんですね。そういう点，海外へ出られて感じられたことはないでしょうか。

□…技術そのものに報酬が

保川　まあ非常にむつかしい問題なんですけど…単に公衆衛生従事者に限らずにこういう面の技術者として考えるとき，外国の場合，技術そのものに対して報酬が払われている，つまりその人の技術を正当に評価するような処遇がなされている。しかも，充実した設備をもち，時間的な余裕をもってやっているという点が根本的に日本の我々の立場と違うという気がしましたね。したがって向うの公衆衛生従事者にしましても自分の仕事にプライドを持ち，又，情熱を持ってやっているというところがうかがえた，と僕は思うのです。ですから，日本の場合，人がない，金がない，ということが先になって，それにあわせて我々はエネルギーをすりへらしているという面があるのです。あちらの場合ですと，その人の持っている能力を最大限に発揮させる為にはどうしたらよいか，その為には，十分な環境というものをまず作ってそこでその人間の能力を発揮させる。たとえば事務管理の面なんかもですね，非常に金がかけられている，機械化できるところはどんどんやっているという点など，私は非常にうらやましいと思いましたね。

八木　アメリカでね，ポストグラデユエィトのパブリックヘルスマンに対するエデュケイションの問題には相当熱意をもっていますね。それを終ったものに対する評価は非常に高い，たとえばドクターであってもポストグラデユエイトの特別コースを経たものについては非常な待遇をしているのですね。ですから，ドクターコースに来てもパブリックヘルスに進んだということに一つのプライドをもっているのですね。それに，病院におる保健婦にしても自分達は少なくとも，国の要請によって仕事をやっているのだと，しかも我々はスペッシャリストだというプライドをもっていますね，ですから，彼女らにしても話に非常に自信があるですよ。特にね，学問的根拠についても勉強していますわ。つっこんでいってもね

ドクター以上のことを知っていることがある。これにはビックリした。もっとも我々は時間が少なかったので…，短時間だったが受けた印象はそうだった。

中山　たしかに日本で公衆衛生に従事しているものは，いわゆる行政の主流をなしている経済とかあるいは権力につながる行政の分野に対して何となくコンプレックスを感じているようなところがありますね。たとえば，公衆衛生学会というようなものでも毎年金の問題で何となく変な苦労をしている，これに対し英国の国立保健会議というものは何となく違うということを感じられますか。

八木　まああの学会全体の印象はフェスティバルですな，一面は。しかし，非常に熱心にやっているのはあれは外人の参加が100人足らず，そのうち20何人が日本人だったのですが，外人の特に新興国の連中というのは熱心だったな。

保川　熱心でしたね。

八木　これはね，インスペクターにしても，何にしてもアフリカで独立した国など実に熱心に発表していましたね。むしろ，イギリスの連中の発表には爆笑の渦でね，学会であんな大笑いする場など見られないがむこうではあれだ，我々には細かな言葉のニュアンスがわからないけれど非常にメリリーな感じがするね，非常に楽しんどる。（笑）その点新興国はまじめだね。僕はある黒人と話したんだけど，〝君，日本知ってるか〟というと〝うん知ってる〟とね。〝なぜ知ってるんだ〟というと〝第2次世界大戦をドイツと一緒にやった国だ〟とね。ここまではまあいいんだ〝日本をどう思う〟と聞いたら〝一面は戦争をやったから責任をとらにゃいかんが，一面は日本が戦争をやったおかげで我々が独立できたんだ，おかげでこうして学会に参加できる，そういう意味では日本に感謝する〟というでね，妙な気分だった。（笑）

中山　本で読んだら爆笑の渦がわくなんてわからないが公衆衛生学会を本当に楽しんでやっているという感じですな。

八木　ストライキだってそうですよ。日本のは鉢巻しめて悲壮感があるけれど向うのはそうじゃない。なんとなくユーモアがあるでしょう。それと同じようにいろんな社会事象の中にそんなのがちらっちらっと見えていたな。

□…嬉しかった同志意識



保川　ロイヤルヘルスコングレスで非常に印象的だったのはむこうのコングレスのチェアマンと英国公衆衛生協会，これがわれわれの為にカクテルパーティーをやってくれたのです。このインペリアルホテルというのは学会のありましたブラックプールのいちばん立派なホテルで，そこへむこうの幹部連中が奥さん同伴で，10組ぐらい出てわれわれをもてなしてくれたのです。

非常に，嬉しく感じましたことはやはり同じ道をめざしている仲間同志だという気持ちがお互いの胸に伝わって，最初のうちは英語が出来なくて日本の恥になりはしないかと交通公社の連中も随分心配したようですが，アルコールが廻ってきますとね，そんな心配はとんでしまって皆んなブロークンイングリッシュで，肩を抱き，グラスを重ね，ジョークをとばし，非常になごやかな，そうして，人種が違うとか国が違うとかなど感じさせないような熱っぽい雰囲気が出たんですね。

私もそのときはだいぶジョークをとばしましてね，たとえば〝英語は母国語だからうまくしゃべるけど日本語はだめだ〟とか，〝オックスフォード大学を僕は出た〟などとね。八木先生を大分心配させたこともあるんですけど，まあ，そういう雰囲気でむこうの一流のメンバーと日本のデレゲーションである我々と，時間のたつのも忘れ非常に楽しく過しまして，国は違ってもお互いに同じ道を進むのだからできる限り力になりあおうという力強い言葉で別れたのですが，そういう雰囲気は，私このたびデレゲーションでいった為に経験できたことで，生涯残る印象であったという気がしますね。

八木　僕等ばかりしゃべっちゃいけないが，今，保川

君がいったジョンブルという印象をもっていったんですよ，つまり老大国であって肩をいからしているとね，そういう一面もありましたよ。しかしね，同じ道を進んでいるんだという気持ちがね，おせじ抜きで感じられましたね。これはありがたかったね，本当に肩を抱いて，手を握り合って話をする。又，妻君が気を配って側へ来て酒をついで廻わる，イギリスにもこんな一面があるんだな，とその時思いましたね。

中山　同じ道を志しておれば全世界に友ありですな。

保川　今いわれたように国際親善の面でも，イギリスの国の中で望まれることはできるだけの努力をすると，力強い言葉を得たのですがやはり我々の仲間は日本だけじゃない，世界は一つだという感じがしましたね。

中山　国田先生は一人でしたね，一人でお行きになっていちいちご苦労なさったでしょうが，又，一人である為，団体で味わい行ないものがあったと思うのですがいかがでしょう。

□…徹底している教育態勢



国田　そうですね，私の場合，思いたったのが急だったものですから手紙はみんな片一方通行なんです。返事をもらわずいきなりのりこんでいっちゃったんですよ。まず電話をかけてね，こういうような男がいるか，手紙は来ているかと聞くんですよ，そうして，一カ所を最低２日から３日滞在している，といいますのは語学力が貧弱だから一回ぐらい行って説明を聞いてもわからない，１日暮して，資料をもって帰えり１晩考え，あくる日質問をもっていくというぐあいに一つの研究所を必ず２日以上行くようにしました。

カリフォルニアとかニューヨーク市の衛生研究所は１週間づついったのですあこれはいいのですが語学力が貧弱であってもアポイントメントをとっていくと非常に親切でした。

カリフォルニアの場合にはあらかじめスケジュールが組んでありましてね，〝朝８時に来い〟というので，最初８時に行ったのですけどね，２日目，大阪と同じように９時半頃いったんですよ，するとさっそく呼びつけて叱られました。〝教えてやらないぞ〟というんですね，〝ちゃんと来い〟というんです。

実験室の中にはいったんですが日本人はいるんですが日本語の出来る人は一人もいないんです。

知った日本人はいるんですけどほかのパーティーにいるんですよ，どうしてもわからなければ電話かけろというんですね，あんまりできが悪くてホームワークまでくれるんです。いうていることに僕が答えると向うには違った意味でとられるんでしょうね。ちょっとおかしいなと思ったらさっそく問題を作って〝お前これ帰ってからやってこい〟というんです。

やさしい問題なんですがね。

目的さえ明確に出しておけばそれに合った教育システムというものをちゃんと作ってくれています。これは大したものですね。それがそれぞれの担当者に全部その話が通じているんです。で，こちらの思うように省略する。つまり予定早くすることも出来ないんです。

中山　向うのスケジュールにピタッと組み込まれているというわけですね。

国田　ええ，それでね，こちらが早く覚えればね午前中の分はそれで終りだといってくれるから出られるんですがね，カリフォルニア州の衛研というのが，カリフォルニア大学のすぐ近くなんです。

そこに，ウイルス研究所というのがある。有名なノーベル賞級の学者がたくさんいる。そこを見にいくのにひまがなくて大変困りました。最後の日にようやく昼飯の時間に逃げ出して目的を果しました。ニューヨーク市の衛研でも，又，ＣＤＣでも同じでした。

中山　ＣＤＣのウイクリーレポートというのが来てるでしょう。そんなのも，そこの海外関係のサービス部でやっているのですか。

国田　ええ，向うはフイルムライブラリーもありましてね，パブリックヘルス関係も全部ＣＤＣで作っています。八木先生もご覧になったと思いますがスタジオが三

つほどありましてね。

八木　僕はＣＤＣへいっていない。

国田　そうですか，八木先生もご一緒の石橋さんのグループが来るっていってましたがね。

あそこの海外に対する協力事業というものは非常に大きなものです。私のところへもアドレスを書きましたら続々送って来ます。

中山　うちんところへも毎月リポートをちゃんと送ってくれています。ただで送ってくれるんですからね。

国田　ええ，フイルムでも…教育用のフイルムがたくさんあるんですがね，手紙一本で送るというんです，ただ送りかえしの費用だけお前持てというんです。

八木　ＮＩＨ（国立衛生研究所）とＣＤＣ（伝染病センター）はいきたかったのですが，とうとういけなかった。

保川　ＮＩＨは行きたかったですね。

中山　カリフォルニア洲立衛生研究所のスケールというのはどうですか。

□…スケールの大きい州立衛研

国田　大きいですね，ウイルスだけで120人，細菌がやはり120人…ぐらいですか，食品衛生が80人くらい，それに公害，公害の場合，バークレーは本拠だけれどもロスの方が大きいんだといっていましたね。

中山　そうすると，そのスケールという点では段違いということですな。

国田　もちろん，カリフォルニアの州立衛生研究所がアメリカでは一番立派でしてね。

中山　まあ州立でね…大阪の公衆衛生研究所も日本でも一番大きいんだけど…ちょっと歯が立たんか。

国田　歯が立ちませんね，あの流れ作業。すべて検査が流れ作業なんです。それで，保健所でやることと衛研でやることと全部区別していますね。

中山　アメリカの保健所というのはどの程度やっているんですか。

国田　いくつあるのか知りませんがある程度フイルターされたものが来るんだということを言っていました。病原体と称してとったものは全部来る。

それから，血清でもポピュラーなものはやるけれどもむつかしいものはダブルチェックの為，全部送って来るんだと。その費用は全部タダだといっていました。これはニューヨークも同じです。

伝染病関係は州あるいは市が年に１回指定するわけですね，こういう病気と思われるもののこういう検体は，こういう内容の検査をする，それは何日で片付ける，それは全部タダでする…ということを，医師，歯科医，大学病院などへ通知するんです。

ニューヨークへ参りましてね，私はニューヨーク大学とコロンビア大学へ行きました。そうして臨床検査室，それも血清，細菌の方をのぞきました。非常にスケールが小さいんです。10人くらいでコチョコチョとやっていました。試検内容も貧弱なんですね，おかしいな，ニューヨークには伝染病はないんかなと思ってましたらそうじゃなくて，コーネル大学も，ニューヨーク大学も，コロンビア大学もあるいは一般の開業医も，伝染病に関しては市の衛生研究所へ送ってるんです。ですから市の衛生研究所は大変ですね，ところが座っていて市の衛生局は全部わかるわけです。伝染病の流行の様相というものがすべてわかる。ですからフィールドワークをやる場合は電話一本でたいてい事が済む。各年令別のこういう血液がほしいといえば担当の病院はすぐ協力してくれる。案内したあるテクニシャンが笑うていましたけど，おそらくドクターはこれで二重がかせぐんだろうと。

中山　つまりタダで検査させておいてドクターは料金をとっている。（笑）

中山　我々の一番の問題はああいうラボラトリー関係の能率化と，日本のラボラトリーのスケールアップというものはやはり実際に見て来ていただいた方々からもっと声を大にやっていただかないとね。

国田　とにかく，パブリックヘルスというのは全般に向うでは経費が大きいわけですね。ニューヨークにいっても，やった件数の金は全部来るというんです。金の心配などしたことないと。もっとも特定な研究的なものをやろうとするとやはり，市の許可がいるわけですが…

NIH＝National Institute of Health　　CDC＝Communicable Diseases Center

中山　ヨーロッパへいかれての検査機関はどうでしたか。

国田　ヨーロッパで衛研らしきものは英国だけしかない，ドイツもフランスも，あんまりそういうものは知らんという人にばかり出会いました。どこかでやっているのでしょうが。

中山　そうしたらラボラトリーサービスはどうやっとるのかな。

国田　結局，ドイツではウイルス関係のものはウイルス研究所がチュービンゲンにありましてね，臨床ウイルス的なものはやはり大学ですね。スイスなどは，WHOによって聞きましたがないようですね。病気そのものがないんだといっていましたが本当かどうか知りません。（笑）

中山　すると日本のスケールと，アメリカのとを比べたら非常に違うわけですね。

国田　ですから日本的な意味では，英国的なスケールでやるべきだと思うんですね，

中山　英国のスケールはどうですか。

国田　小さいですね，伝染病関係でも。

中山　しかし英国のラボラトリーというものは専門化しておるでしょう。

国田　ええ，微生物は微生物だけで下から上までピラミッド式の組織になりまして，全部集めますと大きいんでしょうね。

中山　カリフォルニア洲立の衛研は日本式に微生物もやる，大気汚染もやる，総合的な研究施設ですね。

国田　ええ，ラボラトリーという名前でね，全部区別されている。日本でいう〝課〟という形ですね。それからもう一つ痛感したことは，カリフォルニアもニューヨークもそうですけど，非常に世界的に著名な学者が衛研におられるということです。どれだけ大学から呼ばれても動かないという人が…

中山　なるほどね，中山所長というふうな所長はおらんわけやな。（笑）

八木　聖露加という病院に僕達いったんだけどね，聖露加と保健所の関係は実にうまく出来ているね。病院と保健所というものが少なくともパブリックヘルスというきずなの中で非常にうまく結ばれている。これは日本でまねせにゃいかんなと思うね。

中山　たしかに大学と行政機関，私立の病院というものと保健所ないし保健婦活動，これは密接にいっていますね。それに，洲立とか市立の研究所が非常に権威ある人を集めている，大阪府などまあ別だけどね。（笑）

八木　そこへもって来てね，あの米国公衆衛生協会というのがその中で溝の役目をしてうまくやっているな。

保川　これは素晴らしいですね。民間のボランタリー活動の巾の広さ，深さというものを感じましたね，といいますのはねアメリカ公衆衛生協会の幹部の人と暫らく話したのですが，大衆の啓蒙というのは我々の務めだ，それからパブリックヘルスワーカー…といいますから我々公衆衛生従事者ということですが…それをこ舞激励するのも我々の務めだとはっきり言いきりましたね。こういうところなど日本にも公衆衛生協会というものがあるんですが考えなければいかん点だと思うんですよ。

八木　とにかく，役所の手の届かないところは我々の仕事だとはっきり言い切ったですよ。

中山　アメリカの学会などの申込書には，アソセイションの中における地位を書く欄が必ずありますが，とにかく，アソセーションとかソサエティというものの評価が非常に高いんですね。

大阪公衆衛生協会の常務理事というたら世界中でとおるというわけにいかんかな。（笑）

八木　その点でね日本公衆衛生協会の石橋先生というのはとおっているよ，大したもんだよ。

国田　日本の厚生大臣の名は知らなくてもね。（笑）

もう一つね，協会の名で思い出したんですけれども，私，カリフォルニアに行きましたら全然老人がいないんですね，実験室には。朝8時から5時までノルマが与えられぎっしりスケジュールが組まれている。ところがニューヨークへ行きますと，やっぱり60前後のおばちゃん達がいましてね，手をふるわしながらつまらん仕事をしている，幹部にその理由を聞きますと彼女らは官吏だ，65才まで首きれないんだといっていました。

カリフォルニアは，だからアソシェーションを編成してメーンの人だけしか官吏じゃない，アソセーションの委託経営にしてあるそうです。能率給的に給料を支払っており，だから洗滌場など3日の予告で首が切れると。

衛生検査技師でも１週間，ドクターでも３カ月といっていました。つまり官吏の枠をはずしてあるんですね。ある業務をアソシエーションのペイによってまかなっており，能率給が徹底しているので良いのが集ってくるというわけです。

□…ライセンスに一苦労

八木　あの連中，随分ライセンスをもっていますよ，保健婦自体がこれは何洲のライセンスというてね。

中山　免状主義やな，日本ではライセンスというものはあまり重要視しない。

八木　学校にはいってしまったらトコロテンだからね。それがポストグラデユエイトにづっと勉強するというようにはつながっていないですね。

中山　中土井君はライセンスを一つもらって来たよね，その苦心談を一つ話してくれませんか。

中土井　私がいたのは南カリフォルニア大学ですが，ロスアンゼルスのオリンピックの開かれた競技場の付近にあるのですが，総合大学としては，南カルフォルニアでは，最も有名な私学です。

その行政学部の中に大気汚染防止研究所というものが出来たのです。

第１回目だということで生徒も集まらず，僕を含めて６人だったんで，個人的に指導できるので良いということでしたが，フェロシップの方は駄目だと。

それに見あうようなものはお前にしてやるとディレクターがいったのですね。最初の２ケ月ほどは，日本人でUSC（南加大）の博士課程にいる人が学校から家庭教師をつけてくれ，英語会話など随分個人指導を受けたのですがそれでも駄目だということで，成人学校へ通いました。ここには英語の出来ないメキシカンが多く，それらの人々の為に，年25セントで毎日，英語を教えているのです。毎晩７時ぐらいから９時ごろまでですが誰にでも教えてくれるのです。

八木　安いね．毎晩ですか。

中土井　ええ毎晩です。英語といってもコースがあって，フアストクラス，セカンドクラスあるいは，アクセントのインプルメントとか…最初事務所へアプリケーションにいくわけです。そこでしゃべる言葉を聞いて〝ああ君なら何々クラス〟というわけです。私は，アクセントインプルメントへ３カ月程いきました。しかし，大学での１日６時間近くの講義を聞くとそれだけで疲れるんですね。

国田　それはよくわかりますよ。とにかく晩飯たべに行きたいんですけどクタクタになってね，ひと眠りしないと出ていかれないですよ。おなかがすいてどうにもならないから外へ出ていくのです。疲れるものですね，最初のうちは…



中土井　講義自身が又，日本の教育の仕方と違うのです。この講習の目的はエアポリションコントロールオフィサーの養成ということですが，南カリフォルニア州では各カウンティーにＡＰＣＤ（大気汚染防止局）というのを作るという法律が出来ていて，それには必ず，エアポリュションコントロールオフィサーつまり所長がいるわけですが，将来この所長になるような教育の仕方をしようというわけです。それともう一つ，原則的にアメリカの教育はプラクチカルな人間にしようということですから，講習を通じてマップコアというのが最後まであったのですね，模擬実習のようなものですね。

一つの例をあげましたら，隣の部屋に先生がいて，こちらの教室にいる生徒個人々々に電話が与えられるわけです。そこでお前は気象学博士になれ，お前は市の衛生局長，お前はサニタリーエンジュニアというように役割が与えられ，向うの部屋から先生が電話をかけてくるわけです。〝私は市民だが，どこそこの公害は一体どうしてくれるのや，などとね。いきなり一週目からあるのです。これには困りましたよ。

中山　講習は内容的にはどうですか。

中土井　そう大したものではないです。

中山　実際に使える人間をどうしても作っていくとい

APCD＝Air Pollution Control District

うことですね，ところで長谷川先生はどうですか。

長谷川　私の場合は見学と講習の要素が半分づつというようなところでしたが，アメリカに４カ月いたので，やはりアメリカの印象が一番強いのですけれど，講習の方から言いますと資料とか実習設備がしっかりしているわけですね。例えば公害といっても大気汚染だけでなく水質汚濁や騒音もはいりますから一応全部見ておこうと思ってウォーターポリユーションの方も一コースとったのですが実習場には大きな人工河をつくっています。又，オハイオ川の水質を検査するのに一日観光船を借切って実習するのです。とにかく，スケールが大きいですね。

私の場合，府の秘書課を通じて各国の大公使館に連絡がしてありましたので行く先々でスケジュールが配慮されていましてね，スエーデンでは日本語のガイドをつけてくれましてね，中学卒業したばかりの娘さんで，東京の下町のような日本語をしゃべるのですね。何んでも東京のアメリカンスクールに10年ほどいたというのですが，大きな貿易商の娘でしてね，奉仕ということできてくれたのですが，ただ金持の娘さんですから昼飯に食いにいこうといっても，大きなところへばかり連れていかれましてね，レシートみてびっくり。大変とられました。（笑）

中山　約束してあったら非常に親切にしてくれるようですね。

中土井　しかし，それも白人だけですよ。ニグロの人すぐ物忘れするので頼りないですよ。

中山　中土井さん，前にいってましたがＡＰＣＤは研究費はチットモないのだとか。

□…研究費にアンバランス

中土井　これはアメリカの直面している問題なんです。調査，検査というのは行政のうちにはいるのだという考え方で，研究に対する責任は州や国がもつべきで地方自治体は研究業務の遂行の責任はないという考え方に立っているのです。

ロスアンゼルスのＡＰＣＤというとアメリカでは一番大きく，古く，大気汚染であれだけの規模をもっているところは世界にはないといわれているくらい。最初出来ましたときは高度な専門家を吸収してロス地方の大気汚染の解明に当ったのです。1963年にはあの有名なクリンエァークトというのが出来て国家が財政的な裏付けをしてくれたわけですね。けれども，その後，州の法律又はカウンティのルールなどが出来て取締行政の方向へＡＰＣＤの方針が変って来たんです。ところが今までいたエンジニア，特にリサーチをしたいケィミニストとか生物関係の人達は，圧倒的に多いのですが研究費を出ない為に研究が出来ないといった状態です。ＡＰＣＤの１階に光化学的スモッグの大きなチャンバーがあるんですよ，このチャンバーは州のヘルスデパートメントがもっていてＡＰＣＤはただ場所を貸しているというだけ°このチャンバーを借りて研究しているだけなんですね，大気汚染に関する研究面と，行政面が，ロスのような進んだ地域でもそんなギャップができているわけですね。

ロスアンゼルスカウンテーというのには５人のスーパーバイザーがいましてね，ＡＰＣＤというのはこのスーパーバイザーに直結した組織なんです。衛生局の中にあるというものではないわけですね。圧力がかかりやすいというわけでしょうか。（笑）

中山　アメリカさんというのは，どうもウォーターポリションの分野も内務省にはいってしまったように，衛生局からどんどん離れていきよる。衛生局というのはだんだんパーソナルヘルスという方向に重点を置きかえてきているようですね。日本でいう民生行政的なものが衛生行政の中へはいって来ているというように…

中土井　しかし，大気汚染のひどいロスだけですよ，ほかの州や自治体では２～３人のエンジニアで衛生局の下でささやかにやっています。

保川　しかし，インスペクターはすごい権限をもっていましたね，日本ではとても考えられない。

中山　日本の場合，インスペクターなんか補助職員といった感じが強いでしょう，保健婦にしても…そういう点，八木，保川両先生の向うのお話と随分違うようですね。

八木　それは日本の責任態勢の中で行政ということにこだわり過ぎているのではないかね。例えば，向うでは

インスペクターの監視行為そのものが法律や技術に照らし即決でやっているが日本ではいちいち上の人のハンをもらってやっている。

中山　そのかわり向うでは教育に非常に力を入れている。日本の一番の欠点は，第一線の人に責任を全面的にまかせないかわりに，教育もあまりしない。又，従事しているものも，どうせ上でチェックするのだからという意識があるんですね。（笑）



長谷川　向うでは何でも専門家制度で，例えば日本でいう事務屋さんにしても財政の専門家だとか庶務の専門家というように，それだけで貫くのです。日本の場合，転々と変りますがね。又，僕のいった大気汚染部の技術屋の課長の下にはいわゆる事務屋というのがいなく，別に事務管理部門が別にあって集中的にやっているわけですね。予算接衝などチーフがまとめてそこへもっていく。

国田　それはディレクターの役目らしいですね。だからボスが強いと要求が通る，僕がいったバッファローの，ちょうど成人病センターのような州立の施設があるのですけれど，続々と新しい建物が建っている。例えば我々微生物の世界では媒養した細胞が必要ですがそれなんかでも１トンタンク，２トンタンクで培養している。又，無菌動物をどんどん作っているが一体どうしているのかと聞いたら，〝いや，まだ研究者がこないから，処分しているんだ〟というんですな，研究費はいくらでもあるんですね。

中山　州立の場合は思いきり技術を伸せ，金はいくらでも出してやるというのですな。

国田　女性のマイクロバィオロジストでも１万５～６千ドルもらうというのですから…

中山　うちでとっているＣ and Ｅニュースにのっていたが，いまや，予算がグッドアイデアを追い越したとね。（笑）

保川　ハーバードのスクールオブパブリックヘルスでも学生のとり方がぜいたくですね，医学部の成績がよくなくてはいかん，最低３人の推せん者がいる。外人の場合，英語のミシガンテストをやる。とにかく，向うは買い手市場で自分の目にかなった者だけを世界中から引き抜き集めているという感じですからね，そこでそういう専門的なトレーニングをやって資格を与え，送り出している。

中山　全く英才教育というやつですな。

国田　僕の友達が台北で大学教授をやっているのでここへライセンスとりにやって来ていました。

八木　プロヘッサーといえども油断は出来ない。そういう点で向うは，能率，技術等という点の評価が非常にきびしいですね。四六時中切磋琢磨する。そういう気持ちでなければ明日はどうなるかわからない。

中山　ちょっと我々はアメリカではもちそうもないな。（笑）

八木　それだけサラリーをやっているということになるんだろうな。（笑）

中山　私が素人の立場でお聞きして考えられることは，特にアメリカは日本と比較にならぬスケールで仕事が行なわれているということ。教育という点に非常に力がかけられていること，それから仕事をしている方が常に切磋琢磨している。生存競争がきびしいということ。そういったことを考えてみると日本の公衆衛生陣営というものはそれの裏がえしの欠点があるというように思いますね，なにかぬるま湯につかってじっとしているというムード。これは何としても改善していかなければいけないと思いますね。

それと，同じ道を進む者の〝世界は一つ〟という同志意識，これは大切にしたいと思います。

いや，どうも貴重なご体験をうかがいありがとうございました。